

1 国内専門家フェローシップ制度

音楽、演劇、舞踊、演芸、伝統芸能等の実演芸術分野で活動する制作者や舞台技術者等に対し、現職以外の芸術団体や文化施設等で1ヶ月から6ヶ月程度の実践的な研修の機会を提供する「国内専門家フェローシップ」を実施しました。現職の現場だけでは経験できない新たな知識や技術の習得を目的とし、多様な実務研修の場、人的交流の機会を提供することで、実務能力の向上と新たな人的ネットワークの構築を促し、「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」にも謳われている、制作者、技術者、運営者、実演家等、実演芸術に係る専門人材の育成をねらいます。

▶ 公募、募集条件

【募集期間】

平成29（2017）年4月24日（月）～6月23日（金） 必着

【対象者】

音楽、演劇、舞踊、演芸、伝統芸能等の実演芸術分野において、プロデューサー、アートマネジメント、舞台技術者等として活動する者で、次の条件を満たす者。

- ①日本国籍又は日本の永住資格を有すること
- ②平成29年4月1日時点で満20歳以上であること
- ③専門とする分野において芸術活動の実績があること
- ④研修修了後も芸術活動に継続して従事し、後進の育成にも貢献し得る者

【研修対象期間】

原則として、平成29（2017）年9月～平成30（2018）年2月とし、この期間内に研修を開始し、開始時期に係らず2月末日までに終了することとしました。

ただし、研修先と研修内容のマッチングの状況により、この通りではない場合があります。

【給付内容】

研修期間に応じて、研修者、研修派遣元、研修受け入れ先それぞれへ次の給付を行いました。

● 研修者

- ①研修開始時及び研修終了時の移動費（航空賃及び有料特急運賃の実費）※遠隔地の場合のみ
- ②研修日当 研修期間中一日当たり5,000円

● 研修派遣元

研修者が現所属団体に雇用されており、所属団体から研修派遣させる場合には、派遣元となる現所属団体に次の費用を給付しました。

- ①研修協力費 研修期間中一日当たり7,840円（月20日分を上限とする）

● 研修受け入れ先

- ①研修指導料 研修期間中一日あたり5,000円（月20日分を上限とする）

【応募方法】

個人からの応募、または所属団体（派遣元）からの応募のいずれかとし、事務局である公益社団法人日本芸能実演家団体協議会（以下、芸団協）への郵送または持ち込みによる受け付けとしました。

なお、募集については、本事業および芸団協のウェブサイトへの掲載、芸団協のSNS等での告知、全国の公立文化施設等への募集案内の発送、メール案内等を行い、全国への周知を図りました。

▶ 応募数と選考

一次選考は、事務局による書類審査（条件審査）としました。二次選考（面接）および選考委員会では外部有識者を選考委員とし、研修目的および将来計画の具体性、研修後の波及効果等、書類と面接による総合的な評価を実施しました。

応募件数は9件、二次選考対象者は9名、選考委員会を経て8名が内定しました。なお、研修者の人数に定員は設けず、申請時の希望研修期間等の諸条件から試算し、予算の範囲内で内定者を選考しています。

▶ 研修先のマッチング

選考を経た内定者の研修目的および今後の活動計画を勘案した上で、内定者本人の希望をもとに、事務局である芸団協が研修受け入れ先および研修内容のマッチングを行いました。本事業の趣旨、内定者の略歴および研修目的、給付内容や保険等の研修受け入れに関する諸条件を研修受け入れ候補先へ説明し、調整を進めました。研修受け入れ先、研修期間が決定した後に、研修者として確定します。結果、下記表の通り、8名が研修者に決定し、9月より順次研修を開始しました。

なお、研修先については、内定者の研修目的や略歴を鑑み、選考委員からの推薦等を受けて、事務局から内定者へ提案することがあります。また、希望する研修期間等の条件の不一致により、申請時の本人の希望とは異なるケースもあります。

氏名	専門職能	派遣元（所属）	研修受け入れ団体	研修期間
いしかわ えり 石川 絵理	アート マネジメント	NPO 法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク	ビッグ・アイ共働機構 国際障害者交流センター ビッグ・アイ	2017年10月5日～ 2017年12月3日
おがわ けいすけ 小川 恵祐	制作	南城市 シュガーホール	公益財団法人しまね文化振興財団 島根県芸術文化センターグラントワ いわみ芸術劇場	2017年11月22日～ 2018年1月17日
こだま しろう 五田 詩朗	制作	NPO 法人こどものみかた	公益財団法人川崎市文化財団 ミュゼ川崎シンフォニーホール	2017年10月18日～ 2018年1月31日
ささき まみ 佐々木 真美	制作	公益財団法人しまね文化振興財団 島根県芸術文化センターグラントワ いわみ芸術劇場	公益財団法人せたがや文化財団 世田谷パブリックシアター	2018年1月20日～ 2018年2月28日
たかはし あやの 高橋 郁乃	アート マネジメント	公益財団法人新潟市芸術文化振興財団 アーツカウンスル新潟	公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団 ロームシアター京都	2017年10月1日～ 2018年2月28日
つないくち よしか 津内口 香淑	制作		公益財団法人神奈川芸術文化財団	2017年9月1日～ 2018年2月28日
ひぐち ひさみ 樋口 寿弥	運営管理	アクティオ株式会社 知多市勤労文化会館	公益財団法人可児市文化芸術振興財団 可児市文化創造センター	2018年1月5日～ 2018年3月4日
めはら しゅん 目原 瞬	舞台技術	公益財団法人水戸市芸術振興財団 水戸芸術館	公益財団法人北九州市芸術文化振興財団 北九州芸術劇場	2017年12月14日～ 2018年2月12日

▶ 研修実施結果の報告

研修者には、研修期間中の月次報告書および研修終了後の修了報告書の提出が義務付けられています。事務局がこれらを収集し、人材育成の実例として、研修成果および課題等の集積を図ります。

平成29（2017）年度の研修者8名は、ジャンルもさることなら、活動拠点とする地域、そして実演芸術への関わり方も多様です。今年度は芸術団体が研修受け入れ先になる例はありませんでしたが、公立劇場、公共団体等、首都圏のみならず多様な地域での研修が実践されました。研修期間は、最長6ヶ月を想定していましたが、結果として2ヶ月未満が5名となりました。これは、マッチングおよび研修受け入れ先の問題というよりも、研修者本人の所属元での業務上の都合によるところが大きいものと考えます。募集期間と研修実施期間が同一年度内であることも、一つの要因になっているのではないのでしょうか。

研修の内容については、研修者の研修目的および活動実績等に合わせ、研修期間中に携わることが可能な事業等のスケジュールを記した「研修計画書」を研修受け入れ先が作成し、研修者（および派遣元）、研修受け入れ先、事務局の三者で共有した上で研修を開始しました。

1 応募理由・研修目的 **2 研修内容** **3 研修成果と課題** **4 展望**

※申請書および報告書より抜粋編集

石川 絵理 NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

【研修受け入れ先】ビッグ・アイ共働機構／国際障害者交流センター ビッグ・アイ

【研修期間】2017年10月5日～2017年12月3日

- 1 自身も聴覚障害の当事者であり、20年にわたる情報保障（手話通訳、文字支援）活動の経験を活かし、障害を持った人々の実演芸術へのアクセシビリティを高めることを目標に、劇場や芸術団体による鑑賞サポートへの知識提供や技術的支援を行っている。しかし自身には実演芸術の制作に関わった経験はなく、芸術創造のプロセスや現場を知ることは急務の課題であった。さらには、全国での実演芸術の鑑賞サポートの充実に向けて、各地の障害者関連団体、福祉関係団体等とのネットワーク構築を図ることを目的に本制度に応募した。
- 2 国際障害者交流センター ビッグ・アイが主催するバリアフリー狂言の公演や、知的・発達障害者に向けた劇場体験プログラム等の運営補佐に携わり、当日を迎えるまでの準備や体制づくり、当日運営における観客および実演家への配慮等を実践的に学んだ。この他、おもに近畿地方の福祉関係団体へ出向き、鑑賞サポートに関するヒアリングや現場視察を行った。
- 3 事業の現場やさまざまな立場の方から話を聞く中で、障害によって多様なニーズがあり、多様な鑑賞サポートを検討する必要があることをあらためて感じた。劇場、芸術団体、実演家に対してもこうした取組への理解を促すとともに、できる最大の工夫をし得る柔軟な体制づくりが、実演芸術を創造する側にも求められることを強く感じた。
- 4 実演芸術の現場に寄り添った情報保障を行うためには、たとえば舞台芸術の知識を持った手話通訳者を養成することも必要である。こうした人材の養成には、福祉の観点からだけでなく、実演芸術分野からも働きかけていくべきではないだろうか。NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークが中心となって、今回の研修を通して得た各地とのネットワークを活かし、実演芸術分野のさまざまな団体とも連携しながら、理解促進と人材育成に向けてますます積極的に取り組んでいきたい。

小川 恵祐 南城市／南城市文化センターシュガーホール

【研修受け入れ先】公益財団法人しまね文化振興財団／島根県芸術文化センターグラントワ いわみ芸術劇場

【研修期間】2017年11月22日～2018年1月17日

- 1 南城市が設置するシュガーホールは、クラシック音楽専用ホールでありながら、地域の伝統芸能やコミュニティを育むことを目的とした市民参加型企画等も実施している。しかし数年後に指定管理者制度の導入を検討しており、その運営管理体制の見直しと、事業を拡大かつ継続していくための資金調達課題となっている。地方における指定管理者制度による劇場運営のノウハウ、地域芸能や市民との関係をどのように構築していくべきかを学ぶことを目的に本制度に応募した。
- 2 全国から参加者が集い3日間にわたり開催する合唱祭「グラントワカンタート」をはじめ、石見美術館との連携事業「ミュージア」や、地元の実演団体による「今福優の新春太鼓祈願」等の打合せや公演現場を通して、事業を多角的に体験した。また、フランチャイズ団体や地元ボランティアとの協働、小中学校での邦楽アウトリーチ事業、石見音楽社中への視察等、多種多様な取組に立ち会った。
- 3 劇場と地域の人々が、奉仕者と享受者という一方的な関係を超えて、文化振興というミッションを共有し、その上で創造的な質の高い事業が成立していることに強く感銘を受けた。とりわけ地域のボランティア会については、非常に活発な意見交換の場となっていることに、劇場運営を市民が支えているような気概を感じた。育成事業と位置付けて、劇場職員がプログラム・オフィサー的な立場で地域の実演団体を支援し、信頼関係を築く姿からも大きな示唆を得た。また、石見美術館といわみ芸術劇場との連携事業「ミュージア」では、指定管理者制度による業務執行体制の課題を乗り越える連携の仕組みづくりを知り、図書館等と併設されているシュガーホールとしても、施設デザイン上の矛盾

を可能性として捉える事業設計の発見となった。

- 4 グラントワでの管理運営、事業運営の実際を、シュガーホールが南城市役所の直轄で運営されている現状と比較しながら見る事ができたことは、非常に大きな経験となった。日常的に広報営業でも積極的に地域へ足を運び、地域の人々と話し、地域の民俗芸能団体にもじっくり寄り添うというグラントワの姿勢から、地方における公立劇場の役割を確認できたような気がする。南城市も民俗芸能の宝庫と言われるが、公立劇場と地域の芸能とが互恵的関係を構築していくための議論をしていきたい。

五田 詩朗 NPO法人こどものみかた

【研修受け入れ先】 公益財団法人川崎市文化財団／ミューザ川崎シンフォニーホール

【研修期間】 2017年10月18日～2018年1月31日

- 1 自身が主宰する音楽NPO法人の運営に生かすため、コンサートホールでの広報宣伝、事業運営の実際を学ぶことを目的に応募した。
- 2 ミューザ川崎シンフォニーホールにおける主催、共催、貸館それぞれの事業に立ち会い、各事業におけるホールの役割を学んだ。研修の一環として、東芝未来科学館との連携事業の企画担当を任せられ、企画、予算作成、当日に向けた準備等、事業実施に至るまでの一連のプロセスを体験することができた。
- 3 ホール職員との交流の中で、地域におけるホールの役割、地域との関係づくりの考え方を学ぶことができた。世界水準の芸術公演が行われる公共ホールが、限られた愛好家が鑑賞するためだけの施設になるのではなく、その活動が社会的効果として地域に還元されていくために、地域社会、芸術団体、行政等、さまざまな組織同士が連携することの重要性を学ぶことができた。
- 4 どんな団体も、それを取り巻く社会とのつながりなくしては成立しないという、基本の考えに立ち戻ることができた。自身の音楽NPO法人についても、組織が生み出す価値をどこに還元していくのか、明確なビジョンを持つことが重要だと感じた。これから自分が携わる事業が、多くの人々から認められるものでありたいと思う。

佐々木 真美 公益財団法人しまね文化振興財団／島根県芸術文化センターグラントワ いわみ芸術劇場

【研修受け入れ先】 公益財団法人せたがや文化財団／世田谷パブリックシアター

【研修期間】 2018年1月20日～2018年2月28日

- 1 グラントワが位置する石見地方は過疎化が進んでおり、劇場までの交通手段、十分ではない事業予算等、近隣地域を含めた市民への良質な芸術体験の機会提供のための課題を感じている。近隣市町の劇場と連携したアウトリーチ等も実施しているが、予算面でも安定した継続実施には課題が残る。県民、近隣住民をはじめ、あらゆる世代の人々が劇場に集い、芸術文化に触れる機会を作り出すための新たな視点を得ることを目的に、本制度へ応募した。
- 2 区内の小学校等でのワークショップ事業、「地域の物語ワークショップ」等、おもに公演事業以外の現場を中心に体験した。
- 3 参加する地域の人々の表情を間近に感じる事ができた。講師となる実演家や劇場スタッフの立ち振る舞いや打合せの様子から、ワークショップ等の取組では何を重視すべきか、多くの示唆が得られた。また、記録係を任せられたことで、記録を情報として残すことで劇場の経験値としての蓄積を図り、今後の事業の質を高める一助になることが実感できた。
- 4 ワークショップ事業においては、進行役、劇場スタッフが密接に目的を共有し、実施内容を細かく相談していた点は非常に勉強になった。劇場スタッフにも豊富な知識と経験が必要であり、劇場スタッフと進行役とが信頼関係を築くことが重要だと気付いた。特に関係性が重視されるワークショップ等の事業は、今回の研修で経験したような内容をどの地域でも同じように出来るとは思わないが、劇場スタッフが専門家として、知識や経験を積むことの重要性を感じている。

高橋 郁乃 公益財団法人新潟市芸術文化振興財団 アーツカウンシル新潟

【研修受け入れ先】 公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団／ロームシアター京都

【研修期間】 2017年10月1日～2018年2月28日

- 1 所属するアーツカウンシル新潟は、市の財団内に設置されており、同財団はりゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館をはじめとする諸施設の管理運営を行っている。地域のアーツカウンシルに従事する中で、地域の文化拠点である公立劇場が果たすべき役割とは何かを捉えなおす視点を得たいと思い、施設運営・管理の観点を学ぶことを目的に応募した。劇場とその地域、そして他地域の劇場との関係の在り方についても、自身の考え方を整理するとともに、アーツカウンシルが地域の実演芸術振興に果たす役割を捉えなおす機会にもしたい。
- 2 定例の管理ミーティング、「友の会」の運営、貸館利用の打合せ等に携わり、劇場の総務としての機能を体験した。また、寄付や会員制度についての近隣施設へのヒアリングや、劇場稼働率の集計・分析等も行い、事業企画ではない面から見た劇場運営の考え方に触れた。
- 3 公立文化施設を構成する要素の中で、事業が注目、評価されることは多々あるが、劇場管理運営が取り上げられることは少ないことに気付いた。「公演」をつくる職員やカンパニーが数多く存在する中で、劇場を管理する専門家が十分にいないことを課題だと感じた。また、寄付をはじめとした、支援する、支援されるといった関係の中からも、その施設の存在によって地域にどんな影響が与えられるか、相対的に考える機会となった。
- 4 劇場管理は、日頃のルーティンワークをこなしていくことと、それによって積み上げられる実績で構成される。しかし、多種多様でありながら節目を明確に区切ることができないことも管理の性格であり、だからこそ立ち止まって考える必要があるにも関わらず、できずにいることも実態である。そこで地域アーツカウンシルとして、劇場管理を考え評価しうる形にすることと、地域の劇場の公平性と不平等性、特異性という相容れないものの筋を通す手伝いをしていきたい。

津内口 淑香

【研修受け入れ団体】 公益財団法人神奈川芸術文化財団

【研修期間】 2017年9月1日～2018年2月28日

- 1 劇団に所属し、俳優と制作を並行してやってきた。その中で、神奈川県が実施するマグネットカルチャー事業（以下、マグカル事業）の一環である「芝居の大学」に関わる機会があり、演劇に初めて触れる地域の人たちと一緒に作り上げる事業に興味を持った。マグカル事業が県内全域に展開することを知り、本研修制度を活用して、その運営と地域との関係づくりを長期的かつ実践的に学びたいと思い、応募した。
- 2 マグカル事業の運営に携わり、県の文化事業の考案、予算編成、実施の過程を学んだ。また、全県展開に当たって、神奈川県内の各地域における調査にも同行した。後半は、マグカル事業としての主催イベントの準備や現場運営にも携わった。
- 3 主催イベントの実施に向けた準備の一つひとつの作業にも、県民の税金を用いて実施されるものだという考え方を強く意識することになった。また、県内の調査を通して、県内各地域の課題や現状を把握するとともに、県内の文化組織とのネットワーク構築に向けた県の役割を感じることができた。イベント実施の制作業務でも、海外カンパニーの招へい公演、劇場の複数セクションとの連携等、初めての経験が多く、実務スキルを身につける機会となった。
- 4 研修を通して、財団主催のマグカル事業が、同じく財団が運営管理するKAAT神奈川芸術劇場との関係性が見えたことは非常に大きな経験となった。この経験を活かし、行政、公立劇場、外郭団体である財団、そして実演芸術団体の役割を認識し、それぞれをつなぐという視点を持って、今後の自身の活動につなげていきたい。

樋口 寿弥 アクティオ株式会社／知多市勤労文化会館

【研修受け入れ先】 公益財団法人可児市文化芸術振興財団／可児市文化創造センター ala

【研修期間】 2018年1月5日～2018年3月4日

- 1 弊社は平成27年度から知多市勤労文化会館の指定管理を受け、運営に当たっている。それまで貸館のみで運営されてきた当館を、地域の交流の場として機能させるべく、自主事業にも取り組んでいる。しかしその中で、公的資金を利用して行う文化芸術活動について、行政や市民に対して自身の言葉で発信しきれない弱さを感じた。職員をリード

し、地域の文化拠点として事業を推進していくためにも、確固たる指針を持つべく自身の学びの機会を得たいと思い、応募した。

- 2 市民参加型事業の稽古から本番までの一連の制作業務を主軸に、期間中に行われる公演事業の現場を体験した。また、市内の学校でのアウトリーチ活動も視察した。
- 3 実務を通して、劇場職員としての考え方、市民と劇場の関係性、地域における劇場の存在意義等、自身の考えを組み立てるための多くのヒントが得られた。特に、市民参加型事業では、劇場職員が事業の目的をしっかりと考え、悩み、工夫し、参加者である市民に対しても丁寧に接している姿に大きな影響を受けた。職員の定着率が高く、職員同士や市民との関係性、事業実施のスキルといった資本の積み上げの重要性を感じた。
- 4 民間会社による指定管理には、有期雇用の人材が多く、異動のたびに積み上げたスキルや信頼関係がほぼ無になってしまうことが常態化しているのではないかと感じている。継続的に人材を育て、確保する経営にシフトすることの必要性を感じている。指定管理者がその地域の社会課題とつながりを持つことで、地域における役割を果たすためにも、地域の人と共に課題を見つけ、支え合いが生まれる会館を目指すという大きな指針を得た。

目原 瞬 公益財団法人水戸市芸術振興財団／水戸芸術館

【研修受け入れ先】公益財団法人北九州市芸術文化振興財団／北九州芸術劇場

【研修期間】2017年12月14日～2018年2月12日

- 1 アルバイト期間を含めて8年にわたり、水戸芸術館に従事してきた。正職員になって2年経つが、他劇場での経験がないため、劇場スタッフとして従事するためにも多様な設備、条件での現場経験が必要であると考え、応募した。
- 2 北九州芸術劇場で実施される各公演の仕込み、本番付き、バラシ作業に、技術スタッフの一員として携わった。また、安全委員会と呼ばれる劇場管理・安全衛生について考える制作、技術、広報等の各セクションを横断して行われる定例会議にも参加した。
- 3 北九州芸術劇場は市民の利用もあるため、劇場内の危険箇所への注意喚起の表示、機材の安全かつ効率的な保管、劇場スタッフ間の情報共有が徹底されていた。単に作品を上演するだけに留まらない、誰もが安全に利用できる場所であるための、劇場技術スタッフとして持つべき視点が得られた。また、研修中に水戸芸術館について北九州芸術劇場のスタッフに紹介する機会が与えられたことが、水戸芸術館での公演打合せ時の新たな手法を思いつききっかけとなった。
- 4 水戸芸術館は基本的に貸館を行わない劇場である。それでも、他館で制作された作品を自主事業として当館で上演したり、地域活性化事業という位置づけで地元の芸術団体が利用することもある。劇場設備や機材の安全管理だけでなく、劇場スタッフとしての各事業への関わり方も検討していきたい。